

新連載

300点超えエミリーの

効率的「ふぞろい」活用法

第 1 回

「ふぞろい」を使った 設問トレーニング

A1 まなび生産性向上
松永 恵璃加

株式会社まなびコンサルティング 代表取締役
中小企業診断士

診断士試験の学習支援事業「まなび生産性向上」を営んでいるエミリーこと松永です。私は、診断士受験においては、独学、ストレート、短期間学習、2次試験300点超えと、4拍子で合格することができました。今月号から、2次試験の得点を上げるための「ふぞろい」を使った効率的な学習法について、全6回にわたって解説します。

また、連載のオマケとして、「ふぞろい」を活用した設問&カテゴリキーワード集（令和3～4年度試験対応）を同時掲載します。ぜひ、毎号集めていただき、2次試験対策にご活用ください。

1. 「ふぞろい」とは

皆さんもご承知のとおり、2次試験は公式解答が公表されません。そのため、多くの再現答案から正解を推測している「ふぞろい」シリーズを使って勉強することが効果的です。

「ふぞろい」とは、参考書『ふぞろいな合格答案』シリーズ（同友館）のことです。本書では、診断士2次試験における膨大な数の再現答案が分析されています。同書に掲載されている「ふぞろい流採点基準」を使えば、解いた過去問を自己採

点することも可能です。

解答がない2次試験において唯一の羅針盤といっても過言ではないのが、「ふぞろい」なのです。

【ふぞろいを使うべき理由】

①代替するものがない

不完全さ、分析精度の向上余地に不足があったとしても、再現答案を多く集めて分析結果と内訳を公表している媒体が他にない以上、「ふぞろい」が最も本試験の得点に近い情報となります。

②合格に必要な情報はそろっている

「ふぞろい」の中身を見れば、解答としての要素はだいたい洗い出されていることがわかります。したがって、再現答案数が全体の5%程度でも、大きな抜け漏れはないだろうと推測できます。

③配点の多少のズレは許容できる

たとえば、「この要素の配点が、『ふぞろい』では5点だったのに、本試験では7点だった」といったズレが多少はあったとしても、そのズレを許容して勉強のPDCAを回すことはできます。「ふぞろい」の点数は優先順位の重みづけです。1点の要素よりも、5点の要素を書くように修正していくとよいでしょう。

2. 設問トレーニングとは

2次試験の問題を解くには80分のまとまった時間が必要です。80分のまとまった時間が取れない場合は、スキマ時間において振り返りや設問トレーニングを行うことが効果的です。

設問トレーニングは、設問だけを見て、「どのような要素を解答すればよいか」を考える練習法です。2次試験の問題を解く際、解答に盛り込む要素は、与件と脳内（1次試験知識）のそれぞれから引っ張ってくる必要があります。この脳内から要素を引っ張ってくる練習に慣れることで、解答作成のスピードアップを図ることができます。

設問トレーニングの手順を解説する前に、2次試験におけるQとAの構造について説明しておきます。2次試験は、設問Qに対して解答Aを答える形になっています。設問には、解答が大きく外れないように、「この範囲の内容を答えてください」という制約条件=ヒントも与えられています。

答えるAは、答えるべきカテゴリ、カテゴリ内の要素（キーワード）という構造で捉えることができます。また、カテゴリ内の要素には、与件から引っ張ってくるものと、脳内から引っ張ってくるものがあります。具体例を示しましょう。

「ふぞろい」には、再現答案を分析し、高得点答案に多く使われている解答キーワードをランキング化した図表が掲載されています。この問題の設問Qに含まれているもの（図表1）、ふぞろいの解答キーワード（図表2）、答えるA（図表3）は右のようになります。

設問トレーニングでは、与件を読まずとも、設問を読むだけで、解答に盛り込む要素を挙げられます。この例で言えば、カテゴリの「獲得・定着の施策」や「効果」、要素の「OJT教育」などを自力で挙げられるようにしていきます。

令和4年度 事例I 第2問

A社が新規就農者を獲得し定着させるために必要な施策について、中小企業診断士として100字以内で助言せよ。

図表1 設問Qに含まれているもの

答えてほしいことQ	施策の助言
制約条件=ヒント	新規就農者を獲得し定着させるためのことを言う

図表2 「ふぞろい」の解答キーワード

獲得・定着の施策 (MAX17点)		
ランク	解答キーワード	点数
1位	地域交流に言及	5点
2位	OJT教育に言及	5点
	減点 OJTに触れず教育だけに言及	-2点
3位	企業理念や農業の魅力に言及	5点
4位	マニュアル化・標準化に言及	3点
5位	働きやすい環境・働き方に言及	3点
6位	Off-JT教育（研修・能力開発）に言及	2点
7位	農業体験・インターンに言及	2点
8位	社内交流・コミュニケーションに言及	2点

効果 (MAX3点)		
ランク	解答キーワード	点数
1位	定着率を高める・帰属意識を高める	2点
2位	獲得する・利用する	1点
3位	モチベーションを高める	1点

図表3 答えるA

答えるべきカテゴリ	獲得・定着の施策、効果
カテゴリ内の要素≒キーワード	地域交流、OJT教育、…
与件から引っ張ってくるもの	地域交流、…
脳内から引っ張ってくるもの	OJT教育、…

3. 設問トレーニングの手順

設問トレーニングは、下記の手順で行います。

(1)、(2)の手順は、特に筆考で行うことをお勧めします。もっとも、稀にいる文章を正しく読めるという方や、移動中のスキマ時間でトレーニングを行う方であれば、単語カードの学習のように暗考でもよいと思います。

(1) 設問を正しく読み解く

診断士2次試験の過去問題を用意し、その設問を正しく読み解きます。

実は、「文章を正しく読む」ことは難易度が高い行為です。人間は、長文になると文章を読み飛ばしてしまいがちになり、そのことによる勘違いも多く発生します。書いてある内容を正しく理解できていないことのほうが多いと思ってください。「自分は日本語が正しく読めている」と勘違いしたままだと、正しく読むための練習をしないため、いつまで経っても文章を正しく読めるようになりません。

では、どうしたら正しく読めるようになるかと言うと、書いて考える「筆考」をするしかありません。人間は基本的に、複雑な暗算ができないように、複雑なことを頭の中であれこれと考える「暗考」はできない仕組みになっています。長い文章を長い文章のまま、理解することはできないと思ってください。

したがって、設問を読み解く際は、重要なキーワードに線を引く、囲う、ピックアップしてメモするなど、書いて考える「筆考」を行ってください。ご自身に合った読める方法で、設問に含まれている「答えてほしいことQ」と「制約条件=ヒント」を読み解いていきましょう。

(2) 答えるべきカテゴリ、要素を洗い出す

設問を読み解くことができたなら、次は答えるべきカテゴリ、要素を洗い出します。この際、与件を読まないといけないことは、わからないままでOKです。与件を暗記しておく必要はありません。

設問を正しく読み解き、答えるべきカテゴリや要素を洗い出す訓練を積んでいくことで、「何となく」ではない論理的な解答が作れるようになります。

(3) 「ふぞろい」の解答キーワードと比較する

ここで、「ふぞろい」を活用します。(2)で洗い出した要素を、お手持ちの「ふぞろい」に掲載されている同問題の解答キーワードと比較し、仮の答え合わせをしていきましょう。自分が思いつかなかった知識があれば、ここで蓄積していきます。

4. 設問トレーニングの注意点

私は、この「ふぞろい」を活用した設問トレーニングの効果は非常に大きいと感じています。ただし、この設問トレーニングでは、「与件から解答要素を引っ張ってくる」練習が除外されているため、与件軽視にならないように注意する必要があります。

「設問」と「1次試験知識」だけでは解答が作れない場合は、必ず「与件」に解答要素を探しに行くため、大きい事故は起こりにくいでしょう。しかし、中途半端に解答が作れてしまう状況であれば、大変危険です。過去問題を解く際には、必ず与件からの解答要素の漏れがないよう、チェックしてください。

今月は、令和4年度の事例Iの問題&カテゴリキーワード集を掲載します。コピー・スキャンしてご活用ください。

解けない問題を解けるようになる 振り返りのプロセスとポイント

A1 まなび生産性向上

松永 恵璃加

株式会社まなびコンサルティング 代表取締役
中小企業診断士

診断士試験の学習支援事業「まなび生産性向上」を営んでいるエミリーこと、松永です。本連載では、参考書『ふぞろいな合格答案』（以下、ふぞろい）を使った効率的学習法について、全6回にわたって解説します。連載のオマケとして、「ふぞろい」を活用した設問&カテゴリキーワード集（令和3～4年度）を掲載します。具体的な使い方は、本誌1月号の第1回をご確認ください。

1. 試験勉強とは何のための時間なのか

試験勉強とは「勉強前に解けなかったはずの問題を勉強後に解けるようにする」ために何かをする時間です。「テキストを読んで授業を聞いて問題を解くこと」ではありません。試験勉強＝「解けない問題を解けるようにすること」です。

そうであれば、試験勉強で最も大切なことは、「振り返りによって、その後の世界線を変えること」ではないでしょうか。勉強しなければ試験本番で解けなかったはずの問題を、勉強することで解けるようにする。「解けなかったはずの世界線」から「解ける世界線」へと移行するための「振り返り」が大切になります。

2. 振り返りのプロセス

2次試験の事例Ⅰ～Ⅲにおける「解けない問題を解けるようにすること」とは、「書けなかったふぞろいの上位要素（キーワード）を書けるようにすること」と言い換えられます。

今回は、「ふぞろい」を使った振り返りのプロセスを紹介します。書けなかった要素を書けるように変革し、「点数が上がる世界線」へと移行し続けましょう！

(1) 「ふぞろい採点」を行う

まず、過去問を解いて、「ふぞろい」を使って採点します。その際に、自分も本来はこれが言いたかった（が、明確には解答に書いていない）、という要素は加点しないようにします。試験は、「本来の言いたかったこと」ではなく、「実際に書いたこと」で戦う勝負だからです。

その観点としては、自己採点だけでなく、受験生同士で相互採点や他者採点などができる機会があると独りよがりな採点にならず、なおよいと思います。

(2) 失点理由の深掘り

次に、あと何を書けば満点解答となったのか、なぜそれを書けなかったのかを考えます。

たとえば、「ふぞろい採点」をした結果、60点だったとします。その場合、残り40点の要素がなぜ書けなかったのか、失点理由を深掘りします。

- ・ 設問文を読めていない、勘違いしている
 - ・ 与件文を読めていない、見落としている
 - ・ 与件と設問の紐づけができていない
 - ・ 脳内から引っ張ってくるべき1次知識の不足
 - ・ 1次知識と設問が結びつかない
 - ・ メモには書けたのに解答に書けなかった
 - ・ 不要な言い換えをしまい加点対象外に
- などなど、さまざまな理由が考えられます。

(3) 対策の立案

失点理由が判明したら、次からどのようにしたら書けるようになるかを考え、対策を立てます。

この際、(2)の失点理由の深掘りができていないと、「〇〇と書けなかったから、次から〇〇と書く」といった、応用が効かない表面的な対策になってしまいます。過去問の答えを表面的に暗記してしまい模試や試験本番の点数が伸びなくなった方は、ここに注意してみてください。

プロセスのミスであれば、「次からは蛍光ペンの引き方を〜のように変えてみる」といったように、プロセスを改善していきましょう。

脳内から引っ張ってくるべき1次知識の不足の場合は、不足していた知識を「あるある」(頻出)として蓄積し、同じ論点のときに脳内から引っ張り出せるようにしておきます。

(4) 解き直し・再「ふぞろい採点」・再振り返り

振り返りだけで終わらず、必ず解き直しをしましょう。振り返りをしたのですから、本来は満点近く取れないとおかしいのですが、そうならない

ケースが多いのが実情でしょう。

たとえば、60点だった方が解き直しをして80点になったとします。答えを知っているはずなのに書けなかった20点分は、その方にとって克服すべき根深い問題である可能性が高いと言えます。

- ・ いつも読み飛ばしてしまう箇所がある
 - ・ 実はその要素(キーワード)の意味がわかっていない
 - ・ 解答作成プロセスの甘い部分がある
- などなど、です。

3. 振り返りの例

(1) 事例Ⅱで競合を問われて、与件文に記載のある「百貨店」が書けなかったとき

この場合、まず、なぜ「百貨店」を書けなかったのかを考えます。その理由が「字数が足りず、与件で触れている文字数が『大型スーパー』では多く、『百貨店』では少なかつたため、書くことをあきらめてしまった」としましょう。

そうしたら、次からどうしたら書けるようになるかを考えます。この場合、「与件で触れている文字数に惑わされず、少しでも指摘があれば解答に含める。解答には多くの要素を詰め込めるよう、適宜、説明部分を圧縮する」が適切な対策として考えられます。

① ②	③	④	⑤
① ② ③ ④ ⑤	⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩	⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮	⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳

百貨店
たせ
書かされたから
① 字数足りず
② 大型スーパーと与件文「たせ」
百貨店
「たせ」の時点で「たせ」も「たせ」
「たせ」の時点で「たせ」も「たせ」
「たせ」の時点で「たせ」も「たせ」
「たせ」の時点で「たせ」も「たせ」

解答用紙に書いた振り返りの思考の跡

(2) 明らかに与件漏れがあったとき

これは、明らかに与件漏れがあった受験生の方と私の会話です。

私：この抜き出せといわんばかりの与件箇所に関が引けなかった理由って、何だと思いませんか？

受験生：う～ん……。第1問から第5問まで設問解釈してから線を引き始めるため、まとめて線を引こうとすると、第1問のことをもう忘れてしまっているんですね。

私：では、第1問を忘れる前に線を引き始めることが必要ですね。

受験生：そうしたら、まず第1問に関する与件だけに線を引いていって、終わったら第2問だけに線を引いて……と順番に引いてみます！

この受験生の方は、このような振り返りのプロセスで、自身で対策を見つけられました。

4. 振り返りのポイント

(1) 目指すのは「ほぼ満点」

前回でもお伝えしましたが、「ふぞろい」の点数は優先順位の重みづけです。1点の要素よりも5点の要素を書けるように修正していきます。

そのため、「ふぞろい」の使い方として、キーワード採点98点を100点にするような努力は必要ありません。90点以上といった「ほぼ満点」を目指しましょう。

(2) 「ほぼ満点」は振り返り3回以内で目指す

ほぼ満点になるまで、3回ほど解き直すことになると思います。それでも点数が上がらない方は、1回、1回の振り返りが甘いと言えます。「できなくても仕方がない」、「できなくて当然」と甘く捉えず、「振り返りをしたのだから、本来は満点近く取れないとおかしい」、「次の1回で仕留めるぞ」というスタンスで臨んでください。

自分一人ではなかなか難しいという方は、受験生仲間や資格学校の講師などに相談してみてもよいでしょう。

(3) 「ふぞろい採点」は論理的な文章が前提

「ふぞろい採点」では、要素（キーワード）が書けているかどうかしか判定できません。仮に文章が支離滅裂な場合、どれほどキーワードを詰め込んでも本番の点数は低くなってしまいます。

特に、因果関係が正しいこと、論理の飛躍がないことが大切です。不安な方は相互採点や他者採点などで確認してみてください。

(4) 筆考が前提

事例Ⅰ～Ⅲにおいても、やはり書いて考える「筆考」が基本となります。脳内でゴチャゴチャと考える「暗考」は時間もかかり、最終的な解答も読みにくくなりがちです。何より、振り返りがきちんとできなくなります。

(5) 忘却対策

失点理由や対策については、「まなびノート」（ミスノート、マイノート）に記しておき、忘れないように繰り返し見返すとよいでしょう。まなびノートには、問題を解く直前に目を通す癖をつけておき、試験本番でも同じようにまなびノートを見返してから臨むようにします。

以上、2次試験の受験生の方は、「試験勉強とは、できない問題をできるようにすること」、「事例Ⅰ～Ⅲにおいては、書けなかったふぞろいの上位要素（キーワード）を書けるようにすること」という2点を意識してください。

今月は、令和4年度の事例Ⅱの問題&カテゴリキーワード集を掲載します。右ページをコピー・スキャンしてご活用ください。